司馬遼太郎著「アメリカ素描」新潮文庫 1989 年 4 月 25 日刊を読む

田舎の三年、京の三日

１.「世界じゅうのどの国でも、研究のためにどういう植物のタネがほしいと頼めば、タダでくれるのです」

(１)そういう国が、世界じゅうのどこにあるだろう。

　この一点でも、アメリカという文明の基礎が、人間に安く豊かに食物をあたえることだということがわかる。

(２)同時に、アメリカ的善意という、国家を越えた世話好きも理解できる。だれにたのまれることなく、世界の世話を焼かねばならぬと思っている。

(３)さらにはその善意が容易に世界性を帯びるというおもしろさもわかるのである。またそのアメリカ的善意が無邪気なほどに戦闘性を帯びるという面をもふくめ、世界史上、こういう国がかつて存在したことがなかったことを思い、あらためてテーブルのまわりを見まわした。

２．私は、そういうふしぎな社会の一部を、二十余日間、旅してきた。もう二度と来ることはないと思うが、毎日が充実した旅だった。なによりも、脳細胞が間断なく刺激されつづけてきた。

３.「田舎の三年、京の三日」

と言いますな、と平田氏に言った。

(１)室町ごろのことわざだとおもうのだが、刺激がちがう、という意味である。

(２)「田舎とは、日本のことですか」

「日本にかぎらず、慣習がつよく人間の独創性を拘束している社会は、どの国でも田舎でしょう」

と、私は、あまりふかい意味をこめずにいった。

(３)むろん、田舎には田舎のよさがある。それは、一種類の文化による安定ということである。

［コメント］

「田舎の三年、京の三日」とはよくものごとの本質を言い表した表現と痛感する。志賀直哉の「リズム」と「マンネリズム」に通じる考え方かも知れない。では、どこが「田舎」でどこが「京」かが次のテーマとなる。案外、身近なところに「京」はあるのかも知れない。素直な心で「京」を捜すのも一興。

― 2009 年 2 月 26 日林明夫記―